共助の記憶とアーカイブ
ー過去の震災をふりかえってー

東京大学先端科学技術研究センター

牧原　出

自己紹介

１９６７　愛知県に生まれる
１９９０　東京大学法学部卒業、同助手
１９９３　東北大学法学部助教授
２００６　東北大学法学研究科教授
→２０１１　東日本大震災
２０１３　東京大学先端科学技術研究センター教授

この間２０００～２００２ロンドン大学、２０１７ケンブリッジ大学で在外研究

専門は政治学・行政学、オーラルヒストリー

過去の分析として

第2章　三大震災における記憶の記録（牧原　出）

１ はじめに：震災とアーカイブ

２ 関東大震災と記録保存

３ 阪神・淡路大震災と「記録保存」の記録

４ 東日本大震災と「アーカイブ」を見渡す視線

５ おわりに：震災の記録保存の意義

「被災者の笑顔」

・「被災者の笑顔」という報道や評論
・「災害ユートピア」論

災害後の「笑顔」「協力」「絆」についての実感
言葉で表現されると薄まってしまう何ものか

公助／共助／自助　という枠組みの持つ意味

震災での経験

そのときどこにいましたか？

自宅、大学、実家、東北電力女川原子力発電所　等々

大学の復興という経験

復興に頑張る人、頑張りすぎる人
復興から逃げる人

その記録の保存

震災後の人々の記憶

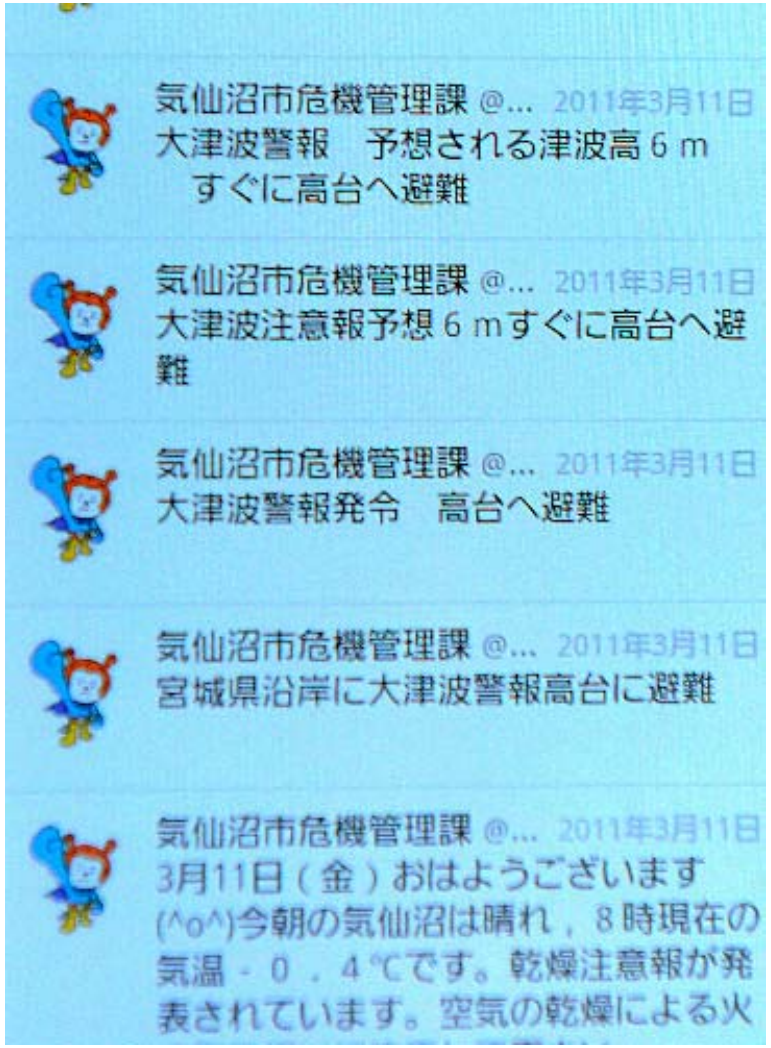
- 多様性
  そこから何が見えるか？

- 新しい社会現象
  阪神・淡路大震災ーボランティア
  東日本大震災ー（デジタル）アーカイブ

- ハイテクとローテクという視点
  新しい状況と変わらない取り組み
  そうした中に「デジタル・アーカイブ」を位置づける

東日本大震災

ソーシャル・メディアの活躍
「石巻日日新聞」手書き版
テレビの可能性？



関東大震災：ハイテクとローテク

ハイテクの例

航空写真（『大正震災誌』）

→最新技術で俯瞰

ローテクの例

挿絵（宮武外骨『震災画報』）

→やわらかい筆致で生き抜く人々を活写

阪神・淡路大震災

①ビデオの時代
放送局制作ビデオ
個人撮影ビデオ
当時のビデオをウェブの最新技術にあわせる
手間が大きい

②阪神・淡路大震災復興誌
紙媒体で10年かけて毎年
1冊編集

東日本大震災とデジタル・アーカイブ
宮城県多賀城市の取り組み
「たがじょう見聞憶」と「共助」

総合的な電子アーカイブ化

聞き取りの実行、市民の記録の収集、公文書の整理

「共助」の記録保存

応急段階の難しさ: 当初は全体に少ない

復興段階で支援の記録が増えつつある

公助・共助・自助

ハイテクの見渡す・俯瞰する眼差し　公助

ローテクの見上げる・仰視する眼差し　自助

どう結びつけるか？　共助とは何か？

共助としての震災ボランティア

- 阪神・淡路大震災以後の経験

- 多様なボランティア
  ごく自然にボランティアに向かう学生

- ボランティア経験者の地域防災への協力

共助としての自治体間連携

- 震災後の多様な協力
- 阪神・淡路大震災時の職員派遣の記録
- ニーズに沿った支援：被災経験が重要

被災者自身の共助

- 「被災者」と「震災関係者」
- 「被災者」同士の共助
- 「震災関係者」と「被災者」の共助
- 「被災者」の共助

災害時自分はどこにいたのだろうか？

- 甚大被害地
- 甚大被害地の近くだが自身も中程度の被災
- 甚大被害地から遠いが自身もいくらかの被災
- 甚大被害地からはるか彼方にいて、被災せず

→共助の可能性、共助をしたくなる気持の持ちようが違ってくる

　過去に訪れた場所、知人の居場所、ひとやものへの思い入れ　といった要素も至る所に入り込む

共助に向けての心構えとは？

- 「会っておける時に友達には会っておいた方がよいと思いました」

- 復興地域の訪問経験

- 事態が複雑、起こってくるものごとの順番を見極める
  ＊被災した仙台市で『阪神淡路震災復興委員会下河辺淳「同時進行」オーラル・ヒストリー』を読む

- ささやかな助け合い、ぎりぎりの救助

共助としての「メッセージ」

「３．１１メモリアルネットワーク」第１回シンポジウム（２０１８．３）

記録の蓄積を「メッセージ」とすることが、記憶の風化に抗することである

〝アーカイブからメッセージへ〟　〝記録から伝承へ〟
そうしたメッセージ・伝承を共有するところに共助のネットワークが生まれる

共助のあり方の模索と提案がアーカイブの可能性を表すのではないか